

タイトル：家康の誤算～「神君の仕組み」の創造と崩壊～（全・237ページ）

出版社：（株）PHP 研究所

発行：2023年11月9日（第一版第一刷）



著者：磯田道史[イソダミチフミ]

1970年、岡山県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（史学）。国際日本文化研究センター教授。専門は日本近世・近代史、社会経済史（本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです）

内容説明

二百六十五年の平和—その体制を徳川家康がつくり上げることができたのは、波瀾万丈の人生と、天下人織田信長・豊臣秀吉の「失敗」より得た学びがあったからだった…。しかし盤石と思われたその体制は、彼の後継者たちによって徐々に崩され、幕末、ついに崩壊する。“神君”家康にとっての「誤算」を、近世から近代まで俯瞰して読み解くと共に、彼がこの国に与えた影響に迫る！

目次

まえがき—「徳川事故調」の報告書

*我々は「失敗事例」を見るほうが、ずっと為になります。現代人も「衰え」に備えなくてはなりません。不敗の仕組みが、どうやってダメになっていったのかを歴史の実例で知っておくのです。

第1章家康はなぜ、幕藩体制を創ることができたのか

○「三強国」に囲まれた松平家で誕生

*当時の三河は、日本の中でも最も戦争が起きやすい境目の地でした。東北日本と西南日本の境目、方言や食文化的にも境目と言っていい場所です。

○今川家で受けた質の高い教育

- * 今川家の戦略は、「三河のプリンス」家康を膝元に置いて育て、強い結束力を誇る松平家臣団を、対織田の最前線で駆使・酷使するというものだったのです。
- * 家康は「今川留学」を通じて、きちんとした学問を学び、一級品を見て、「中央」「天下」というものがわかるようになったと言っていいでしょう。時折、家来に見せる芝居があったその高い自己演出力は、生い立ちによるものなのかもしれません。

○桶狭間と本能寺—二度の転機

- * 天正十年はすごい年です。武田も信長も滅びました。家康にとって織田・今川・武田家という三強国が全部無くなり、そして家康はこの三強国が持っていたものの多くをポケットに入れ、一気に天下が狙えるポジションに立てたわけです。

○信長・秀吉と何が違っていったのか

- * 相手側に、「分」という持ち場の「限り」を守っていれば、家の永続が保障される仕組みを、家康は日本全国土につくり、長期政権への道を切り拓いたのでした。

○家康による「家の再生劇」に学ぶ

- * 歴史と我々が地続きなのを認識するのは、大切なことです。家康の生涯は、令和の日本に参考となるものを多く含んでいます。超大国であったアメリカの覇権が翳りを見せ始め、新興大国の中国と対立し始めた昨今、伝統的な今川家と新興の織田家の対立の史実を見て、似ているところは似ている、似ていない所は似ていない、と考えを深めてみるのも、無駄ではないでしょう。
- * 徳川が強い領国拡張志向を持った武田家に背後を脅かされた恐怖は、大国に囲まれた今日の日本を彷彿とさせます。
- * また松平家(徳川家)は、祖父の代に最盛期を迎え、父の代に没落し、そこから盛り返して天下の家となりました。令和の日本も、祖父の代に高度成長で栄え、父の代に平成のバブル崩壊で落ちぶれ、残念ながら没落の最中です。家康による「家の再生劇」に学べることも少なくないでしょうが、本書では、家康が作った天下の仕掛けの謎を追って行きたいと思えます。

第2章 江戸時代、誰が「神君の仕組み」を崩したのか

- * 家康は「平和の基」になるような制度を作り、265年の長期の徳川幕府は続きました。しかし、制度と政策は時流とともに変わり、家康のルールを変えてしまったがゆえに、「幕府の命脈を縮めてしまった結果に繋がったのでは」と思えるケースも多いのです。

○改易制度の緩和—有力な外様大名が生き残る

- * 家康が作った平和の仕組みの中で、一番やってはいけなかったのは、改易制度の緩和です。早い時期では、無嗣改易が行われましたが、1700年以降は、「由井正雪の乱」や「赤穂浪士の討ち入り」の影響もあり、無嗣改易が激減しました。その結果、有力な外様大名が全て残ることになりました。
- * 無嗣改易制度の緩和は、浪人が増え社会不安が生じたのも理由の一つですが、四代将軍・家綱以降「大名出身」の将軍が多く、大名が困るような制度の推進はやりにくかったのでしょう。

○人質制度の廃止—“幕府への恐れ”がなくなった

- * 参勤交代の費用が各藩の財政にとって重い負担となる事により、十四代家茂の時代に、参勤交代制度は緩められました。又、もう一つの人質制度の「大名証人制度」は、それよりも早く骨抜きにされています。その結果、幕末期、各地で大名が自分の領地で「割拠」する動きが生じました。

○城と大船の建造解禁—軍事バランスが崩壊

- * 家康が用意した「一国一城」制度は、島津家、伊達家など不徹底な部分もある制度でしたが、幕末に「西洋の接近」が生じたことで、一気に崩れました。又、家康が用意した「大船建造の禁」は、江戸時代後期まで続きましたが、ペリー来航後に廃止されます。海軍解禁の動きが、幕府の終焉を早めたのは確実です。

○新たな通貨の鑄造—討幕の資金源に

* 徳川政権は、大名に「銭のライセンス生産」を認めてしまい、その結果、目端が利く薩摩藩、長州藩、土佐藩などに賈金を作られ、倒幕の資金源となってしまいました。

○外交の不安定な動き—貿易の利潤と最新鋭兵器

* 幕府にとって惜まれるのは、家康の死後、三浦按針の提言を無視し、イギリスと伊豆半島など江戸の近辺で貿易をやらなかったことです。幕府は貿易の利潤を独占するだけでなく、最新鋭の兵器を国内のどの藩より早く手に入れる可能性もあり、薩摩藩などに出し抜かれずに済んだはずで。

○意思決定機関の劣化—誰もが政治に参画

* 四代・家綱の時代から、意思決定者の劣化が進み、「世襲の弊害」が出てきました。「徳川一門や外様大名は政治に関与させない」という家康の作った仕組みは、なし崩しに葬り去られ、外様大名どころか、下級武士が実質に政策決定に参加し、その権力体が、倒幕し、明治の憲法と内閣制を創っていきました。

第3章 幕末、「神君の仕組み」はかくして崩壊した

○江戸時代、天皇はどう変容したか

* 江戸初期の幕府は、天皇と大名との繋がりを遮断する仕掛けを考えました。しかし、寛政年間(1789-1801)直後に、歴史家の頼山陽が「日本外史」や「通議」を著し、「本来、日本の政権は天皇にあり、武家が持っているのは特異な姿」と、暗に示しました。

○阿部正弘が開いたパンドラの箱

* 尊皇思想の老中阿部正弘は、黒船来航という重大局面で、「人材登用」と「言路韜晦」を進める。言路韜晦により人々に政治提言を許し、結果的に藩は「天皇や朝廷を利用する」ことに気付き、雄藩は京都工作始めます。それに対し井伊大老は「安政の大獄」を断行し、「桜田門外の変」へと続きます。

○京都に集まった浪士たちの失敗

* 浪士たちは、攘夷や倒幕をするには、雄藩の力を後ろ楯にする必要があると学習し、死に物狂いで何かをやろうとし、幕府側は、こういう者と戦う為に『新撰組』にアウトソーシングしました。衰えた組織が、『アウトソーシングの請負組織』を利用するのは、よくあることです。

○非現実的な長州、武力を見せつける薩摩

* 「八月十八日の政変」「蛤御門の変」を通じて勢いを失った長州藩、それに対し戦闘にも強く、うまく立ち回った西郷隆盛を中心とする薩摩藩の存在感は、さらに高まりました。

○慶喜の将軍就任と孝明天皇の死

* 江戸の幕府は、いきなり薩長に滅ぼされたのではなく、まず京都の一・会・桑(一橋、会津、桑名藩)に実権を奪われているのです。京都が政局の中心になり、大名と京都を切り離そうとした家康や家光の仕掛けは、壊れてしまいました。
* 慶喜は、フランスをモデルにして軍隊の近代化を図る、その情報を得た薩摩藩は、幕府の近代化を葬って、更地にすると決めました。倒幕の密勅が下りる前に、慶喜は大政奉還を宣言します。どのような政体を作るかの過程で、龍馬は暗殺されます。

○京都における政局の終幕

* 大政奉還はされましたが、朝廷は「官僚機構」を持っておらず、徳川家は実質的には政権に居続けており、徳川宗家が「国内最大の領国」を持っています。焦った西郷隆盛と大久保利通は、王政復古の号令を出すクーデターを構想し、慶喜を追いつめ、旧幕府軍は新政府側軍に鳥羽伏見の戦いで敗れ、大阪城へ撤退します。これで、京都が政局の中心となった時代は終わりを告げ始めるのです。

○錦の御旗の効果は対慶喜だけではない

* 一枚上手の西郷隆盛たちは、イギリスを使って「大阪湾を封鎖する」と慶喜をおどし、慶喜は大阪城を抜け出し江戸に逃げ帰ります、これが真相です。「旧幕府に味方すれば、朝敵として名指しされる」という危機感が、諸大名の間に決定的な「分断」を作り出したと言えるでしょう。

○徹底抗戦と恭順、それぞれの選択の理由

* 全体的に見て、低い身分から幕府に登用され恩義を感じていた人、洋式軍隊の指揮に自信のあった人、薩長の志士をさんざん弾圧・殺害したので新政府に処刑されそうな人、が結合して新政府軍に抵抗し、戊辰戦争が長期化したと言えます。

○どこよりも人材豊富だった幕府

* 幕府は近代化が出来なかったのではなく、むしろ幕府が先に近代化しそうに見えたので、薩長が焦り、急いで戦いに持ち込んで潰した、というのが真相に近いのです。従って、近代化を担う人材は、日本の中では幕府が最も豊富でした。

○旧幕臣たちは「縁の下の力持ち」だった

* 新政府は、日本の近代化を進める上で、薩長土肥だけでは人材不足で、旧幕府の優秀な人材の西洋知識に頼るほかありませんでした。結局のところ、明治新政府は「徳川幕府」の外側を壊し、内側の優秀な人材を利用して、近代化を成し遂げたといつてよいでしょう。

第4章 「神君の仕組み」を破壊した人々が創った近代日本とは

○討幕における主演・助演・脇役

* 薩長の手を結ばせ幕府に対抗し、朝廷中心の政権を作ろうと岩倉具視は目論見ました。その目論見は成功し、倒幕の「主演は薩摩、助演は長州。脇役に土佐、第二幕で活躍した肥前(佐賀)がその後に続く」という序列です。この時の功績を背景に新政府の権力を分け合うことになりました。

○踏襲された江戸時代の会議の形式

* ここで問題なのは、薩長土肥がそれぞれ、特定の省に偏った影響力を持ったことです。当然ながら、四番目の佐賀藩などは言い分が通りにくく、不満が溜まりやすかった面があります。

○リーダーが二年近く、国を空ける異常事態

* 明治新政府がやるべき課題は山積していました。大久保利通、木戸孝充、伊藤博文は、権力に粘着的であり、西洋の知識と技術を持つ人材には任せず、自分たちで自ら行うべく、長期間、国を空ける異常事態を招きました。全て迷惑を被るのは国民なのです。

* その反対に西郷隆盛は筋が通っています。また、西郷や福沢諭吉は、どんな環境におかれても、「自分の力」で「自分になる」ことができます。人物を見るときには、「環境(出身や家格)の影響でその地位にいるのか、本人の力でその地位にいるのか」を考えるのは、歴史を見るときポイントの一つです。

○岩倉使節団がいない間の約束破りの改革

* 留守を預かった参議は西郷隆盛、板垣退助、大隈重信で、留守中「廃藩置県の事後処理以外の新規の改革は行わない」と約束させられましたが、大隈は「今しかない」と様々な改革に着手していきます。

○近代化の「基点」となった地租改正

* 留守政府は、「学制」「太陽暦の採用」「徴兵令」の重要な改革を行い、更により重視すべき「地租改正」を行いました。その鍵は「排他的所有権」の導入にありました。これは「武士の特権=領主権」を消滅させる事に繋がり、鹿児島、熊本などの士族の反乱が相次ぐ引き金の一つになった可能性があります。

○帰国した使節団、そして西南戦争へ

* 帰国した大久保達の使節団は、主導権を取り戻すべく、征韓論論争により西郷らを下野に至らしめ、西南戦争へと繋がります。政府側は「西郷包囲策」の手を打ち、戦争は短期間で鎮圧されました。

○伊藤博文が方向転換した裏事情

* 長州の伊藤博文らは、西南戦争後に、より強くなった薩摩閥から主導権を取ろうと動き、その材料が「議会」でした。政治的直感力の鋭い伊藤は、議会開設にあたり「大隈と福沢が裏で手を結び、自分までも追い落とす陰謀を企てている

のではないかと疑い、彼らを出し抜こうとします。「明治14年の政変」により、ドイツ式国会が開設されます。しかし、この憲法では、天皇の軍隊であり、後々の「国家の大事故」となった昭和16年の日米開戦になってしまいました。

第5章 家康から考える「日本人というもの」

○「物くさ太郎」と下剋上、そして「家意識」

* 徳川家康が作った「仕組み」は日本の庶民の心のうちにまで影響しています。戦国時代末期には、「家意識」が上から下へと人々に浸透しました。人々は下剋上の意識も持つようになり、そんな肯定感から「一寸法師」や「物くさ太郎」などの物語は語り継がれたのでしょう。

○民の意識を「下剋上」から「安定」志向へ

* 徳川政権は、「百姓までの家の成立」の中で「徳川家が尊崇され、支配が長く続く構造」を作り上げていきます。家康は、「支配を正当化する道具たてとして、神格化が必要」と考えるようになったと思われる。

* 徳川時代の安定の背景には、上から身分という役割と序列が与えられ、その「身」の「分」を守っている限り、人並みの生活も、老後の安定も与えられたのです。

○将軍を天皇よりスゴイ存在にするために

* 民は自分たちの上に立つ権力者を、あまねく大地を照らして、恵みを与えてくれる太陽に重ねることで理解していたのです。その点からすれば、家康が自分を太陽に見立てるのは効果的な「演出」だったといえるでしょう。そして、東側を担当する「東照」として「天照」とは違うという姿勢を示したのは政治的に見事です。そして、東照大権現が天照大権現になったかのように振る舞い、見せかけることで、徳川家による支配の正統性を主張したのです。

* 徳川時代、天皇の分家にあたる宮家の創設も抑えられる傾向にありました。徳川の平和の裏には、「皇族への生殖管理」があったのは事実です。これは徳川政権が長く続いた理由の一面と言えます。

* 全国各地に設けられた東照宮で、お祭りが催され、庶民が参加し、「神君の天下泰平の恩恵」を感じることで、家康の権威は死後も保たれていました。

○忠義と親孝行、正路と慈悲

* 徳川政権は、下剋上のエネルギーを止めてしまうために朱子学を重んじ、「あくまでも分際の枠内で上を目指す」社会を目指しました。

○幕府が民に信じてほしくない思想とは

* 徳川幕府が民に信じてほしい思想は、朱子学で、危険思想は一神教で「神の下の平等」を説くキリスト教でした。他に、危険思想は、陽明学、日蓮宗・不受不施派、など。しかし、江戸後期になると、民衆は徳川将軍や東照大権現以外のものに救済を求め始めました。

○「世直し」一揆と伊勢神宮の「おかげ」

* 世直しの動きは、幕末になって内憂外患が進むと加速しました。結局、徳川政権にとどめをさしたのが、「天皇」を旗印にした政権です。

* 豊臣寄り反徳川的だった伊勢神宮の神主たちは、幕末に「ええじゃないか踊り」を進め、庶民の伊勢信仰を高め、民衆には、「天照皇大神とその子孫たる天皇のおかげ」という意識が高まっていくのです。

○文人たちのサロンが突き崩していった

* 草むらに隠れた天皇の家来という「草莽の臣」の概念が、徳川を倒す理論的柱になりました。更に、日本列島の津々浦々まで、インテリのサークル・サロンが形成され、徳川が恐れていた「人々の自由なヨコの繋がりができてしまいました。

* 徳川政権は軍事政権ですから。男性優位の理屈で社会観念が出来上がりやすく、例えば側室、妾、愛人などが近代になっても持ち越されてしまった面があります。

○徳川の世と女性・子どもの幸せ

- * 徳川は武威の政権でしたので男性優位になりがちでしたが、五代将軍・綱吉の「生類憐みの令」のように「女性や子どもの幸せ」の観点から、政策転換を行っています。
- * 徳川時代中後期になると「主従制下の官僚制」の弊害が目立ってきました。その延長上に、昭和 18 年卒業する小学生に「往け、戦へ、死ね」と祝辞を述べる校長が現れました。周囲に同調し、忖度し、生活を守る「ちっぽけな役人の身勝手さ」は恐ろしいものです。死ねと言って保身を図る事さえ起きかねないのです。

○大事とする自己哲学の軸を持つ

- * 児童に「死ね」と言った校長は、その後京都府校長会長に出世されていますが、自分の無い恥ずかしい人だと思います。こういう人を出世させてしまうのは、我々、人間の習性に原因があります。本当に偉い人は、人にモノや満足をたくさん分け与えた人です。
- * 徳川社会は強者が偉い、権威に従え、という権威主義の一面も生じてしまいました。しかし、徳川時代の途中で既存の価値にとらわれない人たちが、サロンを作って集まり、後の世を変えるきっかけを作りました。
- * そこに現在の我々が参考にすべき一つのモデルがあるかもしれません。日本は今、衰退を続けていて、新たな変革が起きるまで数十年かかるかもしれませんが、「徳川時代の壊れ方」にこそ、大いなるヒントが含まれているのです。
- * 最後に、世界の国の中で、落とした財布が一番無事に戻ってきやすいのは日本とされています。これは、死罪の多かった「徳川のしつけ」で、日本史の恐ろしい秘部なのです。でも、「正直」や「勤勉」は徳川時代が高めていった日本人の美德です。日本が貧しくなったとか、それを不安がる論調が多いのですが、家康がつくった長い平和の良い方の遺産を、未来の人類の幸せに活かしていければ、よいのではないのでしょうか。//